＝退官にあたって＝

消えゆく老兵のことば：夢をもち続けよう
高橋史樹（自然環境研究コース教授）

15年間の広島での思い出は400字（編集長の指示）では書き切れないけれど、二言、三言。しんどいことも多かったが、まず、楽しく過ごさせていただいたことに感謝。そして、私と気持ちの通ずる何人もの人たちが、これからの総合科学部を支えてくれるであろうことを思うと、老兵は安心して消え去ることができる。

総合科学：総合科学部は何をするところか？　ある人は「境界領域の研究」なんて言う。私はそうは思わない。「美と科学の統合」が総合科学部の理念だろう。歌って踊って科学する方が境界領域よりはよっぽどましだし、その方が楽しいにきまっている。私は自然界の美、何億年かの歴史が育んだ自然の摂理（調和）を大切にしてゆきたい。

環境科学：環境科学にも産官学の協同はあるが、民が入るのは少ない。建前では良い格好をするが、本音では有力者は抵抗するし、民は無視されやすい。将来もそうだろう。しかし、上を向いて歩こう。そして、夢を持ち続けよう。

皆さんくれぐれもお体を大切に。

退官にあたって
中峯照悦（社会科学コース教授）

いつの間にか25年をこの学部で過ごしました。こういう文を書くようにいわれまして、退職の実感がにわかに強まってまいりましたが、退職することには一面とても楽しさを覚えております。還暦を迎えました頃から、感覚が段々むかしに戻ってゆくのを感じるようになりました。わたしたちの16歳から20歳といいますと、ちょうど戦争が終わった直後の数年間ですが、その頃に読んだ楽しかった書物や聴いた音楽がたいへん新鮮に思い出されて、そうしたむかしに戻りたいと、ときとしてしきりに思うようになりました。これは、いってみれば、古典古代に戻ろうとするに似ていますが、そうはいっても63歳からのことですから、せいぜい世紀末の第二ルネサンスといったところなんでしょうけれど、しかし意外な楽しさを覚えております。長らく有難うございました。

広島大学への感謝
芝田進午（社会科学コース教授）

広島大学在職の17年間は、私の教育・研究と人生にとって、まことに有り難いものであった。

この間、哲学、社会諸科学、芸術論等にとっての「ヒロシマ」の意味を研究し、それを学生諸君に伝えることが私の中心課題であったし、私の世界観と学問の在り方も大きく影響された。

そのことと結びついて、私は「ヒロシマ」の意味を訴えつづける多くの知識人、被爆者の方々のご面識をえて、人生についても多くのことを学ぶことができた。

さらに、そのことをつうじて、私は1980年以降、毎年8月5日夜、反核音楽を演奏する「ノーモア・ヒロシマ・コンサート」を主宰してくることができたし、また広島のさまざまな市民運動、民主主義の運動と交流し、連帯してくることができた。

これらの体験は、私の退職後の人生においても大きな意味を持ちつづけるにちがいない。広島大学に心から感謝するゆえんである。

退官にあたって
天野　實（物質生命科学コース教授）

昭和51年３月に総合科学部へ来てから早17年になる。総合科学部１回生がちょうど４月から専門の実験を始める時期であった。ミニ理学部的でなく総合科学部生に相応しいメニューにしようと張り切ったものである。一般教育の授業では一年次生の細胞生物学を担当した。この授業科目は生命科学の基礎としてだけでなくまさに学際的な勉強を必要とする科目であり、学生も私も大いに楽しむことが出来た。

生命科学の最近の進歩は目ざましく、毎週の新聞記事を紹介することから始めた変な授業のおかげで医学の基礎を一生の職業とした学生や、総合科学部へ入学後生物科学を専攻するように進路を変更した学生が出現し、今でも研究室を訪れてくれることは望外の幸である。

言葉では言い表すことの出来ない苦しいこともあったが、楽しい事の多い人生の一時期であった。これも全て私を取りまく総合科学部の教官、事務官、学生の私に対する暖かい思いやりの賜と深く感謝している。総合科学部の益々の発展を祈念しつつ心から御礼を申しあげる。

＝新任教員紹介＝

ティモシー・ケビン・ホイ　　地域文化コース・フルブライト招聘講師

私は、フルブライト招聘講師として、地域文化コース・アメリカ研究群に赴任して参りましたテキサス女子大学准教授のティモシー・ホイです。イースト・テキサス大学で政治学と歴史学を学んだ後、私は同大学院で政治学の修士号、そしてデューク大学で政治理論を専攻とする博士号を取得しました。その後、ジョーンズ・ホプキンス大学とコーネル大学において、初期近代政治理論を研究しました。現在、最も関心がある研究テーマは、政治と文化の関係および古代・近代民主主義理論です。テキサス女子大学では5年間「学業優秀者用特別授業プログラム」のディレクターを務めましたし、現在は学部評議会のメンバーとして活動しており、昨年はそこで、予算・企画委員会の委員長を務めました。

私の家族を紹介しますと、妻の「マサコ」は北九州市出身の日本人女性で、私達には3歳になったばかりの息子「ナサニエル」がいます。彼女は、テキサス女子大学で日本語コースの授業を担当したり、地元企業のために翻訳を手掛けたりしています。広島に住み始めて一ヶ月余りになりますが、現在私は、新しい言葉を覚えるという「挑戦」を楽しんでおり、妻は日本への里帰りを楽しんでおり、息子は新幹線、バス、フェリー、路面電車、自転車、そしてテキサスにはない新しい玩具を楽しんでおります。どうぞよろしくお願いします。

井上研二　外国語コース教授

大阪外国語大学ロシア語科卒業（S41.3）後、早稲田大学大学院文学研究科でチェーホフを研究。ドクター・コース修了（S47.3）後、旧ソ連ノーボスチ通信社東京支局勤務（翻訳者）、千葉大学教養部非常勤講師、時事通信社外信部・世界週報編集部記者（S48.10-S55.9）、海上保安大学校外国語講座助教授（S55.9-S61.3）、同大学校教授（S61.4-H4.7）を経て平成4年8月1日付で本学総合科学部教授として着任。

専攻は現代ロシア語。

担当授業科目はロシア語（文法、講読）、ロシア語表現法演習、総合言語理論、総合科目「民族とことば」。来年度からはこれに時事ロシア語が加わる。

昭和15年4月、旧満州（中国東北部）チチハル生まれ。現住所は広島市東区牛田東2－15－8－204。

吉田純子　人間文化コース助教授

故郷の京都を離れ、夫と年頃の息子二人から離れて、単身赴任中です。当初は二つの住居を持つことに興奮しておりましたが、二重生活に慣れるにつれ、人格が京都と広島の間で分裂してしまいそうな気配です。

児童文学と英語の教官として採用されたことを、とても感謝しております。今まで児童文学と英語の教師の二項がなかなか両立し難かったからです。これから思う存分働けます。関心のある分野は、特にファンタジー作品や妖精物語ですが、最近は自らの生き方を顧みるうえで、アメリカ児童文学の中に描かれた家族像や女性像を探り、「アメリカ児童文学・家族探しの旅」という一冊にまとめました。今後は意気盛んな英米のモダン・ファンタジーの作家の作品に取り組みたいと考えております。

秋霜悲し、巨星墜つ

－今堀誠二先生を悼む－

戸田吉信（総合科学部長）

故　今堀誠二名誉教授

去る10月9日、私たちは本学名誉教授今堀誠二先生を失った。最近の病状からおしてある程度覚悟はしていたが、いざ訃報に接したとき、ずっしりと重い鉈の一撃が心の芯にまで至った思いだった。谷本賞を授賞されたのを機に、教職員からの祝意の一端を両評議員ともども病院に持参したのが、先生と永別の機会となった。先生は素直に喜んでくださった。とくに私の呼びかけに応じてくれた80人ばかりの、先生のご在職中はほんの若造だった面々の名を食い入るように見つめられ、私に向かって何度も、「戸田さん、学部をよろしく」と繰り返し語りかけられた。「私たちは来年早々移転します、移転後の祝賀会には、先生、車椅子ででもぜひお出ください」と申しあげると、弱々しい微笑を浮かべて、じっと遠い所に視線を漂わせておられた姿を、私は生涯忘れないだろう。

今堀先生には三つの巨大な側面がある。一つは学者の中の学者。言わずと知れた中国社会研究の前人未到の輝かしい業績。次に、平和問題に関する積極的な発言。広島に生きる学者の良心がなせる業である。最後に、大学人、教育者としての仕事。リベラル・アーツを基本に据えた先生の教育理念は、総合科学部創設として大輪の花を咲かせた。

いま、海鳴りのような響きとともに押し寄せつつある大学改革の潮の中で、私たちは謙虚に初心に立ち帰り、学部の理念を再検討・再構築し、これによって学部を引き締め、なんとしてもこれを一貫カリキュラムの中に実現しなければならない。そして総合科学部は全学の改革に魁となろうではないか。このことのみが、先生のご遺志に応えるわれわれの義務であると私は考える。

そのための捨て石となることを、私は先生の霊前に誓う。

（1992年10月29日）

読者からの手紙 －飛翔43号について－

切刀義人（物質生命科学コース助手）

実は４月に赴任したため飛翔は一度しか読んだことがありませんでした。これを機にバックナンバーを手にいれ読んでみたのですが、私個人の意見としては対外的ＰＲを目指すのならおもいっきり内輪のことをテーマに選ぶべきだと思います。「総科の存在意義は？」「広大の存在価値は？」「大学での研究生活は？」なんてテーマは永遠のテーマでありだれしも１度は考えることで、興味深く読ませて頂きました。この様な特集や大学生活の悩み（西条移転など）を書いた方が総科像がはっきりと浮かび上がり、例えば総科を目指している受験生等には大いに参考になると思います。学生は、思いついたままに本音を書き、教官は頑固に定説を説く、なんて言うのは大学での日常そのもので、これからもこのスタイルを崩さずにいってほしいと思います。総科には立場や考え方の違う様々な人がいますので、飛翔はそのような人々の意見を戦わせる場を提供し続けていってほしいと思います。

菅原　恵（事務官・社会科学コース）

特集を読んで

今回の飛翔の特集「地球環境」により多くの事を教えられ、多くの事を導かれました。

身近な環境問題を取り上げられ、改めて自分の身の回りの環境問題に目を向けようと思ったのは、“三つのＲ”です。Reduce（減らす）、Reuse（使い捨てをしない）、Recycle（リサイクル）、私でも身近に実行できる問題の解決方法です。又、各方面の先生方が地球環境問題に異なった立場から取り組んでおられ、新クリーンエネルギー、水素の良さ、その利用技術の課題等それぞれが、それぞれの立場で環境破壊防止に寄与できる事を教えてもらった、幅広い総合科学部らしい特集でした。

改めて、総合科学部の学際的部分を認識致しました。

曽宮　和夫（生物圏科学研究科Ｍ２）

飛翔編集委員の皆様へ

ご苦労さまです。大変興味深く拝見させてもらいましたが、幾つかの点で若干気になるところがあるので感想と併せて書かせてもらいます。

Ｉ：環境問題

「中国地方の山林は江戸時代に既に伐採し尽くされた」というのは、少し表現がきつすぎるように思える。明らかに言い過ぎです。但し、瀬戸内沿岸部の森林に関していえば、当たらずとも遠からずといったところでしょうか。cf.「環境考古学事始」安田喜憲、ＮＨＫブックス／「禿げ山の研究」千葉徳爾、そしえて

熱帯林の減少について

植林を積極的に進めていく事は大切なことだが、慎重に行う事も大切ではないか。持続可能な利用システムの確立こそ急務でしょう。木材は使わない訳には行かないわけですから。翻って、日本の林業の置かれている状態も深刻です。少し前に知床の伐採問題が話題になりました。その時、本多勝一氏が「知床を考える」という本を編集していました。この本は色々な立場の人が書いていて面白い本ではあるが、一つ不思議に思ったのは日本の林業の現状と熱帯林の伐採の連動性を世界的な観点から論じた人が一人としていなかった事です。

砂漠化

砂漠化が進行しているのは砂漠周辺地域のみではない。森林伐採によって砂漠化が進行しているのはむしろ、若干離れたところでしょう。砂漠周辺にはいわゆる森林は多くない。2年前(1990年)に横浜で国際生態学会(ＩＮＴＥＣＯＬ)が開かれたが、その中で砂漠化に関する講演を聞く機会があった。そこで講演者の一人が最も強調していたのは砂漠化の要因をしっかりと理解する事だった。即ち気候の変動によるものなのか、それともその他の人為的影響によるものなのかを区分し、闇雲に対応をするのではなくそれに応じた対策を立てることこそ肝要だと述べていて深い感銘を受けた。

「物質循環のうちの１つでしかない木」というのは言いたい事はわからなくもないがもっとよい表現があったのではと思う。

身近な環境問題

総合科学部における「環境保護の動き」というよりは研究の動向というべきでしょう。

II：地球環境安全保障

地球環境安全

この問題として「バイオダイバーシティ問題」を位置づけるのは少々無理があるように思えます。(また、特集「地球環境」というタイトルですがこれは特集「環境問題」の方が内容を見る限りよりぴったりだったような気もします。)

それはさておき、核問題に関し状況は確かに好転と言えるとは思うが、しかし不安定さという点から見ればむしろ悪化しているという指摘は正しい。広島に学ぶ学生としてもう少し配慮してほしいと感じました。これは私の勝手な希望です。

III：環境倫理学

①の自然の生存権の問題の所で、生態系、景観にも“生存”の権利とありますが、これは少し変な表現の様な気がします。

③の地球全体主義ですが、これはGLOBALISMの訳とするともう少し別の言い方の方がよいと思う。例えばリーダーズ英和辞典では世界的関与主義として載っている。自分としては坂本義和氏（に限った訳でもなく一般的にそうだと思うが）がしばしば議論している様に汎世界主義と訳しておきたい。

環境問題はここで指摘するまでもなく多様な側面を持つ。私達が環境問題に関わっていく上で、常に意識しておかなければならないのは、この多様さ、複雑さを理解し、多角的な視点から判断をしていくという事であろう。従って私達の視線と行動は状況に応じて臨機応変である必要があるが、その時の指針となる基本的な視点は四つにまとめられると、私は考えている。その四つの視点とは汎世界主義的視点、地域主義的視点、歴史的未来志向主義的視点、そして自然生命主義的視点である。紙面の都合上、一つ一つ詳しくは述べないが加藤尚武氏の言う所の環境倫理学の三つの柱は全て上に述べた視点に包括され得る事は容易に理解して頂けよう。

上記の観点から見た結果が相互に矛盾する事例を挙げる事は容易でさえあるが、しかしそれらから見て満足できない解決は真の解決では有り得ないと言う事もまた間違いない。

編集後記

■編集長から■

編集長の孤独

「フロッピーディスクが壊れた！」11月17日火曜日午後11時頃、学生編集委員M君がパソコンの前で途方に暮れている。たまたま研究室にいた僕の研究室の４年生Ｓ君が、復旧に取り組んでいる。外の用事を済ませて戻ってきた僕の前に広がる世界は、絶望的だった。昨日も徹夜をして、ようやく明日の締切に間に合いそう、という編集作業の大詰めを迎えた時に発生した事故だった。「飛翔」44号の全52ページ分の文書データが消えてしまった。「なぜ、いつものようにバックアップをとっておかなかったのか。」「打ち直すと全員動員しても三日はかかる。」後悔と疲労感が、睡眠不足の身体を駆け巡る。それから、大学院生のＦ君に応援を頼み、はては大阪にいる卒業生のパソコンの神様M君にも電話でアドバイスをもらい、午前３時頃ようやく全文章データを復活させることが出来た。ホッ。やれやれ、これで何とか朝までには完成しそうだ。

というような教官と学生によるドタバタをへて、前号（43号）から装いを新たにした「飛翔」の第二号を皆さんにお届けする事ができる。前号からパソコン編集等のイノベーションを試みたが、今号においても新企画、レイアウト等の実験をおこなった。編集委員会としては、限られた条件の中で「やるかぎりはより良いものを」という思いを、最大化したつもりである。むろん雑誌の評価は、読者の判断に委ねられるものであるが。

43号から教官・職員・学生の共同編集という総合科学部報「飛翔」本来の編集スタイルを採用している。新しい試みには、必ず反作用が伴う。本来のスタイルにして、かつ新しい編集スタイルにも賛否両論を聞いている。共同編集スタイルそのものが実験であり、まだまだ試行錯誤の段階である。しかし我々の学部そのものが実験学部であり、実験精神は常に旺盛に発揮したいと考える。

総合科学部とはどういう学部なのか、そこにおける広報誌はどうあるべきか、というビジョンについてこの一年間考えてきた。大学・学部が抱える問題の深刻さにくらべ、あまりにも大学内における真摯な議論が少ないのではなかろうか。これでは、「日本の大学は外圧でしか変わらない」と言われてもしかたがない。特に学生諸君には、学部のあり方に対するラディカルな問題提起を期待したいし、「飛翔」はそのような情報を伝えるメディアとしてこそ意味があると考える。ともかく「飛翔」の実験は始まった。良いアウトプットが得られるかどうかは、実験遂行者の強烈な想いと着実な実行力にかかっている。(松岡俊二)

■学生編集委員会から■

飛翔44号の編集作業も終わり、ようやく編集後記を書くところまでたどりつくことができた。そして今回、編集作業を終えるにあたって、各人の飛翔の編集に対する思いを話し合おうということになった。そこでは様々な意見が飛び出したが、ここにそのすべてを載せることはできない。というわけで、ここでは飛翔44号の編集作業に対する反省と、次号以降の編集体制へ向けての抱負を述べておこうと思う。

今回の飛翔は・・

Ａ：今回の飛翔は広報誌の役割が強かったと思う。

Ｃ：初期の目的が広報誌ということだった

から、今までのほうがずれていたんでは・・。

B：学生の意見を述べる場っていうのも初期の目的だったでしょう。でも読者が多様になると内容が一般的になってしまうよね。

A：今回は特にそうだよね。

C：去年は内部向けだったので内容が絞れた。今回は外部にも向けられたので散漫なものになったと思う。どっちにもおもしろいっていうのはちょっと。思いきってどちらかに重点を置くのでないと両立はむずかしい。

B：広報誌でもあるけど、学生の意見を述べる場でもあるんだし、特集は意見を述べる場として確保したいな。

D：そういう特集のほうが、今の学生はどう考えてるのかっていうのを知らせるのにはいいんじゃない？

合同編集会議の一コマ

編集者としての自覚！？

A：編集者としての自覚っていうのは、自分たちが書くことだけじゃなくて、依頼したり取材したりすることもあるんだってM先生は言われるけれど。つまり、エディターかライターかっていう問題。

D：ただ編集だけじゃおもしろくない。

C：何で編集がおもしろくないかっていうと、自分たちの興味に沿って記事を集めることができないからで。技量不足もあるけど。

B：「わたしはこういうことが言いたい」っていうコンセプトがあって、それに即した記事を集めて組み立てるんであれば、結果としては自分たちの意見を言ったことになる。

ただ編集だけじゃおもしろくない。じゃあなにか言える場所をつくろうよ。ということで、掲示板に飛翔コーナーを計画中。

乞う、ご期待！！

東千田キャンパスの風景

次号はどうする？

C：今回の飛翔は学生で全体のコンセプトづくりをせずに、特集だけをやっていたので、全体をやるときに欲求不満に陥って、自分で記事を書きたくなった。

D：学生の意見も少しはあったほうが・・。今回はエッセイのみだった。

B：「こういうの作りたいんだけど書いてくれない？」という頼み方をするのが理想だと思う。そういうコンセプトを早く出さないといけない。動き出すのが遅いと、先生が出される枠にどうしても従うことになると思う。次の号も同時に考えながらやるのがいいのかも。ある程度形にして提案しないと。

A：先手必勝。

というわけで平成5年度の学生編集委員会の新体制は、さっそく活動開始。春に新委員を迎える頃には、何か具体的な企画を作っておきたい。

飛翔を、みんなで作り上げていく、外にも内にも開かれた場にしたい。総合科学部に対する意見だけでなく、エッセイや写真、イラストなどの作品も広く募集したい。投稿箱を常設するなど、作品を寄せやすくする方法も検討している。寄せてもらった作品は、年二回の飛翔、及び掲示板も使ってできるだけ発表したい。掲示板では、飛翔の編集の進行状況も、逐次知らせようと思う。

「ボランティアじゃねえぞ！」

数年前の某学生編集長の名言。学生に編集を任せながら、最終段階になって教職員が口をはさむ旧編集体制に対する不満の爆発であった。

現在までなにかにつけて愛用されている伝説の言葉である。

新キャンパスにおいては、ぜひとも環境の整った「飛翔委員会の部屋」を確保したい。そうなれば、快適に楽しく今度はプラスイメージの伝説の言葉づくりに励めるというものだ。

学生編集委員募集！

次号からは、各自の興味、時間的な都合に合わせて、様々な形で参加できるような編集体制を作っていきたいと思います。

記者のみ、レイアウトのみの参加、投稿、会議への飛び入り参加など、部分的な参加も大歓迎！

文章を書きたいあなた、イラストの得意なあなた、撮った写真を見せたいあなた、ヤジ馬精神旺盛なあなた、飛翔編集室を訪ねてみよう。

ただでパソコン編集のノウハウが学べるぞ。めったに起こらないと言われるフロッピーディスクの破損事故現場に立ち会えるかも知れないぞ！？　編集委員一同心より、皆様のお越しをお待ちしています。

飛翔をいろいろな人たちが自己主張できる場にしていきたいので、興味をもたれた方はぜひ編集室を訪ねてみてください。

■飛翔への意見をお寄せ下さい■

本号への意見・感想をお寄せ下さい。学生の皆さんは学生編集委員へ。教職員の皆さんは広報委員会へ。卒業生・社会人の皆さんは総合科学部厚生補導係へ（住所は裏表紙）。

■総合科学部の新住所■

1993年4月から総合科学部は〒724東広島市鏡山1-7-1に移転します。代表電話は0824-22-7111です。

■編集委員■

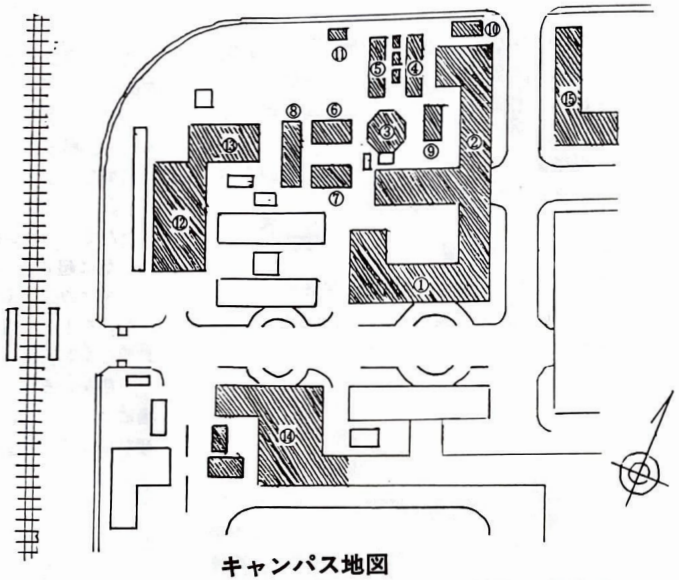
▽松岡俊二（編集長：社会科学コース助教授）・吉村慎太郎（地域文化コース助教授）・小島健一（物質生命科学コース助教授）・中越信和（自然環境研究コース助教授）・笠井達哉（生体行動科学コース教授）

▽木上尊子（厚生補導係長）・中村　猛（厚生補導係）・村上　尚（庶務係）

▽南場千里（学生編集長：社会科学コース3年）・内田知宏（物質生命科学コース3年）・森野美和（地域文化コース3年）・古田智子（地域文化コース2年）・中島英紀（社会文化コース2年）・大森秀美（自然環境研究コース2年）・村田雅洋（1年）・榊原恵子（1年）・蟹博文（1年）・池野剛（1年）

東千田キャンパス を記録する

① 新　館
② 自然科学棟
③ 大講義室
④ プレハブ１号棟
⑤ プレハブ２号棟
⑥ プレハブ３号棟
⑦ プレハブ４号棟
⑧ プレハブ５号棟
⑨ プレハブ６号棟
⑩ プレハブ７号棟
⑪ プレハブ８号棟
⑫ 体育館
⑬ プール
⑭ 旧教育学部
⑮ 旧理学部



キャンパス地図

総合科学部には新館、自然科学棟、大講義室、プレハブなどたくさんの建物がある。例えば新館の01～04と言った番号のついた部屋のある側が、どうなっているのかしっかり把握している人は少なかろう。

1階：用度・経理／学務・厚生補導／第１小会議室／第２小会議室
2階：コース共通事務室／情報基礎／数理情報学生実験室／202号（ＬＬ）／203号（ＬＬ）／204号（ＬＬ）／操作室
3階：情報行動電子計算室／302号／303号／304号（視聴覚）
4階：401Ｂ／401Ａ／402号（視聴覚）／403号／404号（視聴覚）
5階：501号／502号（視聴覚）／503号／504号（視聴覚）
6階：601号／602号（視聴覚）603号／604号（視聴覚）

←「石・・・」

大学会館前のこの石は、1945年８月６日、広島に原爆が投下され、東千田キャンパス内で亡くなった人々の慰霊のために設置されたものである。生協食堂の収容定員が小さいので、昼には石の周りの芝生でだべって食べている。

大講義室→

写真の人物が男ばかりなのは、工学部の授業だからだそうだ。聴講受付期間（とテスト期間）は席も前から埋まっていく。先生が来られる前に撮らせてもらったので何となく雰囲気もなごやかである。大講義室の授業は一般教育がほとんどであるが、大規模な教室での講義では先生がマイクを用いざるを得ない。しかし中には、マイクを使わずに熱弁をふるわれ、のどをつぶされる先生もおられる。

←生協書籍部

ジャンプから学術書まで一割引で買えるのはうれしい。大学の書店にコミックがあるとは入学当初思わなかった。15%引きセールも見逃せない。本当にお得である。専門書が豊富なのは嬉しいし、いかにも大学の書店という感じである。用もないのについつい行ってしまうのは私だけではないだろう。ちなみに、私はここでの立ち読みが趣味である。

コンテナ→

二食の前のコンテナの絵について
文サが倉庫として使用している。
美術サークルに話がきて、当時アクリル水彩に入部していたので、先輩と一緒に描いた。
ただ目立ちたい一心であった。
（理学部植物Ｍ２　野宮　治人）

とにかく無彩色になりがちな大学構内において、葛飾北斎ばりの波の絵は、これがコンテナだということを忘れさせる程の出来映えである。